

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	『雪女物語・下』翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2008
Jtitle	三田國文 No.48 (2008. 12) ,p.97- 103
JaLC DOI	10.14991/002.20081200-0097
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20081200-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『雪女物語・下』翻刻

石川 透

凡例

本書は、架蔵の絵巻『雪女物語・下』である。本書の影印は、『広がる奈良絵本・絵巻』（三弥井書店、二〇〇八年一月刊）に紹介した。解題等は、そちらを参照していただきたい。

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「」「」括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。

〔雪女物語・下〕

さるあひた、たゝのまんちうは、かの女房をさきにたて、に
よいかたけの、たにく峰くを、たつね給ひけれとも、ほら
は、さらになかりけり。

こゝに、いはのかけに、ちいさきうろのあり。かの女□う
に、「これは、いかに」と、とひ給へは、「かやうのうろにて

候」と申す。「さらは、そのうろを、かりいたせ」と、おほせ
ければ、大せいのせこのもの、ゆみ、なきなた、くまでなとに
て、せむれとも、けたもの、一つもいたされは、「さて、い
かゝすへき」と、ありければ、御ともの中より、一人、すゝみ
出て、申やう、「それ、□たものは、なましはをたきて、ふす
へたるには、しかし」とそ、申ける。

まんちう、きこしめし、「さらは、ふすへよ」とて、まつ、
かえてのえたを、たきて、大勢、手にく、あふきをもちて、
かのあなへ、けふりを、あふきいければ、しはしもたまら
す、たぬき三ひき、いてけるを、やはか、のかすへき。そくし
に、みな、うちころされたり。

〔挿絵・第一図〕

まんちうは、よろこひ、きさんし給ひけり。さて、三つのだ
ぬきを、五てうかはらにさらし、立たれたるふたに、「此ころ、
らく中にて、人をなやましける雪女」とそ、かゝれたる。

これを見て、京わらんへの、申けるは、「かけられたるたぬ
きは、三つともに、ふるたぬきにあらす。けしやうするたぬき
は、としふるきは、こうをつみたるたぬきこそ、はくるなれ

と、むかしより申ならはせり。此三つのためきは、よも、ゆきをんなには、あらし」と、人く、申ける。されはこそ、あんのことく、又、雪をんな、出て、人をとると申す。

まんちう、きこしめされ、「これ、やすからぬ事也。ためきにては、あらし。いかさま、てんまのしよきやうたるらん。さりながら、かの女はうに、いよく、たつねてみん」と、おほしめし、又、かのけちよをめされ、「これは、いかに」と、の給へは、女はう、申やう、「このほと、さらされたるためきは、ふるためきにあらず。かの雪をんなは、こうをつみたるためきにて、しんつうをえたるものなれば、みかりのときは、さためて、たの山へ、にけつらんと、そんし候。又、まへかとのたちきすも、さつそく、いゆへし。たとひ、すまんきにて、せめ給ふとも、しんつうをえたるもの、いかてか、たやすく、ころさるへき。をんなにけしやうして、むみやうの歌を、よみ申候あひた、ひそかに、たゝ一人、御出候ひて、うたの返しなどをあそはし、かの雪女をあいつて、やなひへ、よひいれたまひて、さて、もん、木戸、とほそのすきまなく、御ふさき候ひて、かの雪をんなを、ころし給は、よも、のかれ候まし。さりながら、天しやうをけやふつて、にくる事も候はん。そのようかいを、よくなされて、たいし給ふへし。もとのためきに、しやうをかへ候はんとき、そのしかいを、とりとゞめ給はすは、したひ、又、いきかへり候まゝ、その御心え、なさるへし」とそ、申ける。

まんちう、「けにも」と覚しめし、「たれか、しかるへきや」と、おほせられければ、人く、申やう、「うこんのしやうけ

んこそ、ふんふのさふらひにて候」と、申ければ、すなはち、雪のよに、うこんのしやうけんにおほせつけられければ、うこん、申けるは、「人けんにて候は、こそ、へんげのものにて候へは、かけろふ、いなつまなどのことく、みえつ、かくれつ、とんつ、くゝつつ、しゆうしさいに、はたらき候よし、うけ給はり候あひた、しかと、たいちつかまつるへきとも、おほえす候。さりながら、御ちやう、おもく候あひた、御うけ申。まつく、わかしたくにかへり、もん、木戸、てんしやうなと、ようかいをよくかまへ、人をみな、たしよへいたし、わつは一人、かくしをく。これは、とほそを、よくしめさせんかため也」。

十二月申しゆん、やはんのころ、たゝ一人、たち出て、らく中をたつねありく。四てう、はうもんにて、うこんのしやうけんは、しはし、立やすらひ、「これよりひかしへや、行へき。又、にしへやゆかん」と、しあんしゐたりしところに、ひかしにあたり、人のあしをと、まちかく聞えければ、うこん、あやししく思ひ、きつとみるに、きゝしにかはらぬ、十七八のひちよ、たけなるかみをみだし、しろきこそにて、くれなるのはかまきて、うこんにむかひ、ことはかくるやうは、「いかに。御身は、たれ人ぞ。われは、御しよをしのひいて、みちふみまよひ、行へきかたをしらす。三てうほり川とやらんは、いつくにて候そ。をしへてたへ」とそ、申ける。

うこん、これをき、うたかひもなき、かのへんげのものそとよ。さらは、一首よみて、心をみん」と思ひ、かくなん、やことなき雲の上人あやしくも

ひとりたとりしみちの玉ほこ
女、かへし、

さよ更てゆきゝの袖もたえくゝの
おりしもわれをとふ人はたそ
と、ありければ、又、うこん、

れいならぬわかたらちねをとひかへる
人に心をへたてはしすな

「れいならぬとは、わつらひ、たらちねは、おやなり。おや
のわつらひを、みまひて、かへるものなり。心をへたてそ、く
るしからぬもの也」といふなり。

女、このうたを聞、「さては、くるしからぬ人」と思ひて、
かくなん、

ものうさよさむきよすからわひしくも
みちのちまたにひとりねやせん

と、よみければ、うこんのしやうけん、

あやなくもみちのちまたのひとりねを

われになさけのあるよしもかな

と、ありければ、又、をんな、

うちつけにはちかはしくもいさなはれ

人のなさけをあたになさしと

といへは、うこん、うれしく思ひて、「さらは、こなたへ」と
て、手を引で、わか屋にかへり、戸をひらき、うちへ入ける。

かねて、こしたることなれば、かのわつは、とほそを、よく
さして、さかつきをとり出し、しゆゝのさかな、とゝのへ
て、もてなし、さかつきのかす、かさなれば、をんな、しやう

たいなく、みえしところに、うこんのしやうけん、思ふやう、
「此をんな、ねたらは」と、まぢけれとも、ねるけしきなけれ
は、そのまゝ、とつてをさへ、「なんち、わうしやうに出て、
人をなやます、けしやうのものぞ。のかすまし」とて、つゝけ
さまに、三かたな、さしとをせば、わつはも、二かたな、さ
す。

さしとをされて、雪女、うこんのしやうけんを、二つに引き
き、かのわつはをつかんで、戸をけやふつていて、わつはを、
人つふてに、うちければ、半町はかり、なけられて、しはら
く、しゝたれとも、又、いきかへり、「人やある」と、よはゝ
りければ、人出て、みるに、かうへ、うちくたけ、こしのほね
も、うちおれたりしかとも、いまた、いきのかよひて、申や
う、「われは、うこんのしやうけんか、わつはなりしか、けし
やうのものに、人つふてにうたれて、かやうのていたらくな
り。しかれとも、うこん、かのけしやうのものを、三かたな、
さしとをす。我らも二かたな、さして候ほとに、かのけしやう
のものを、たいちしたりと、おほえ候。うこんは、引きかれ
て、うせ候ひぬ。このよし、まんちうへ、おほせあげ給へ」
と、いひて、つゝに、うせにけり。

人ゝ、まんちうへ、このよし、申あければ、まんちう、
きこしめし、「うこんや、わつはか事は、ふひんなるしたいか
な」と、おほせられ、「されとも、五かたなまで、さしたらん
に、なとか、そのたぬき、しなて、あるへきか」と、ふひんに
思しめす中にも、御よろこひは、かきりなし。

〔挿絵・第二図〕

かくて、そのうち、雪ふれとも、雪をんなも、出されは、みやこ人、あんとの思ひをなし、こくとあんをんに、そのとしは、くれにけり。

明る長とく二年、きさらぎの末つかた、よもの山くは、花咲て、かすみをくめる袖のゆき、にきめくおりふし、たいらのかねもりの御子、かねのふとて、とし十八になり給ひしか、きりやう、こつから、人にすくれ、歌のみち、くはんけんにも、くらからさりし人なり。

しかるに、かねのふ、ひかし山、さくらかりして、をとほ山のふもとを、馬にのり、さゝめかひて、とをり給ひしところに、山かけに、まかうちまはし、ひやうふを立、しゆえんなかはとみえつるか、十五六はかりなる女はうの、ひすいのかんさし、せんけんのひん、かつらのまゆすみ、にうはのすかたにて、かねのふの、馬のくちにすかり、「一しゆのかけのやとりも、みなこれ、たしやうのえんそかし。しはらく、やすみ給へ」と、かねのふをとめければ、もとより、かねのふ、いろこのみなる人にて、かくなむ、

もえいつるみちのくさはの露のまも
なさは人の心なりけり

とありて、むまよりおり給ひ、まくのうちへいりて、みたまへは、下女二三人よりほかに、人もなし。

〔挿絵・第三図〕

さて、さけをすゝめ、さかつきを、さいつ、さゝれつし給ふほとに、ななき春の日も、やうく暮かたになりければ、かねのふ、「いとま申さん」と、おほせければ、女房、かねのふの

たもとをひかへて、いふやうは、「御はつかしく候へとも、思ひ、うちにあれは、いろ、ほかにあらはれさふらふそや。あはれ、御なさけもなし。ましまさは、いさなひつれて、ゆかせたまへ」とて、かほに、もみちを引ちらし、ふかく、思ひいりて、うちしほれたる、ありさまなり。

かねのふ、これを見給ひて、こゝろにおもはるゝやうは、「ふしきのことを、申つるものかな。さためて、我に、ふかく心をかくるけしきなれば、いさなひ、つれて行へけれども、いかさま、この女はうは、たゝ人ならず。よしありけなる人なれば、つれてかへりたらん時、のちのとかめも、いかならむとは、思へとも、よし、それもちからなし。此ことにつき、たとひ、つみにはしつむ共、みやこにて、みなれたる事もなきほどの、ひしんなるか、かやうにいひかくることを、いかてか、むなしくなすへし」と、おもひ給ひて、かねのふ、上らうに、の給ふやうは、「こなたよりこそ、かくは、申たく思ひ候つれとも、はゝかりなれば、御心のうち、をしはかりかたく候ひて、かさねて、玉つきのたよりをとそんし、まつ、たゝ今は、なこりの袖をふりきり、立わかれんとせしところに、かくおほせらるゝ、うれしきは、たとへむかたもなし。さりながら、のちのとかめのいかならんとは、思ひしかとも、よし、君ゆへに、いかなるつみにしつむとも、ちからをよはぬしたいなり。さらは、いさなひかへらん」とて、かのひめをこしにのせ、さきにたてゝ、かへられける。

かねのふ、やかたに入まいらせ、まことの大き上らうとおもひ、いつきかしつき、てうあいし給ふこそ、はかなけれ。しの

ひ殿をこしらへ、かのひめをいれをき給ひ、をとほ山よりいさなひ給へは、をとほひめとそ、なつけ給ひける。

あるゆふくれのことなりしに、かねのふ、かのおとはひめと二人、にはのえんにいて、ゆふす、みしたまひて、かくなん、

夕ま暮はしるに袖のすゝしくも

かほりふきくるをとほ山風

と、ありければ、ひめ、とりあへず、

をとほ山ふきおろす風のかほるより

まさりし君の袖のうつり香

と、よみければ、かねのふ、ひめの心を見んと思ひ給ひて、ことをとりいたし、しらへたまひて、をとほひめに、まいらせられければ、をとほひめのきんのしらへ、世にたくひなき御ことなれば、かねのふは、なを、いやましの思ひ、あきからず。

さて又、かねのふ、の給ひけるは、「ことしは、わかちゝ、

かねもりの、七年きになりぬれば、ほけきやう一ふ、かき、くやうするなり。ひめも、かき給はんか」と、おほせければ、「されは、れうしを給はれ」とて、すなはち、ほけきやうをかけるを、かねのふ、御らんして、「さて、うつくしき、ふてのすさひかな。これ、たゝ人には、よもあらし。いかさま、神ほとけのけしんか」と、あるときは、たつとみ、又あるときは、「天にあらは、ひよくのとり、地にあらは、れんのえたとならん」と、ふかく、ちきりをこめ給ひしところに、かねのふのうちに、ゆりと申をんなあり。

曰ころ、かねのふ、ふかくちきりをこめ給ひ、てうあい、な

のめならさりしか、をとほひめに思ひかへられ、明くれ、ゆりひめは、ものうき思ひにふししつみけるか、かねのふに申やう、「此ころ、御てうあひなきれ候をとほせせんは、人けんとおほしめして、ふかく、御ちきりをこめさせ給ふ事の、はかなさよ。あれは、こそふゆのころ、みやこにて、人をなやませし、ゆきをんなにて候そや。御うちの人、いつれもみな、しらぬものはなく候へとも、あまり、御てうあいなきれ候ゆへ、はかりたてまつりて、申あく人もなきとこそ、おほえ候へ。わらはも、とく、そんなして候へとも、『わらはを、すくさせ給ふにより、あらぬ事を申』と、覚しめされ候はんと、そんなして、今まで、申さず候へとも、『御ため、あしきことなり』と、人く、しきりに申候ほとに、なに事をもかへりみず、御ためはかりと、おもひまいらせて、かやうに、申あけ候。此うへは、めしをかるへきも、又、めしをかるましきも、御心まかせにて候」とそ、申ける。

かねのふ、きゝ給ひて、「われを、思ひかへたることなれば、あらぬことを、さゝゆる」と、おほしめして、の給ひけるは、「さて、たぬきにてあるへきせうこは」と、おほせければ、ゆり姫、申やう、「せうこと申は、御うちの人、一人ものこらす、くちをそろへて申こそ、たゝしきせうこにて候はん」と、申せば、かねのふは、すこしもちる給はず、「よしなきこと、な申そ」と、の給ひければ、ゆりひめは、ちからをよはぬふせいなり。

かくて、をとほせせんは、ゆりひめか、さゝへ申ことを、たれいふともなけれとも、聞つけて、ほむらをこかし、はら立

て、その夜のふくるを、まちみたり。いたはしや、ゆりひめは、かねのふに、ちうを申せ共、もちる給はねは、いとゞ、ものうきとこにふし、すこし、まところまんとせしところに、なにとはしらす、ゆりひめを、とつてをしつけ、くひねちきつて、こくうへすて、むくろはかりそ、のこりける。

このよし、かねのふに申ければ、かねのふ、大きにおとろき、みたまへは、たちかたなにて、きりたるにはあらず。「いかさま、これは、人けんのわきにては、あるましき」と、思ひ給へとも、をとほひめこせんのしわとは、ゆめく、しろしめされす。

さるほとに、かねのふのうちに、ちうせつのをのこ有て、かねのふに申やう、「は、かりおほく候へとも、そんなるむねを、申あげ候。このたひ、ゆりひめをかいし申事、人けんのわきにては、よもあらし。はかせに、うらなはせ御らん候へかし」と、申ければ、かねのふ、「けにも」と、おほしめし、すなはち、はかせに、うらなはさせ給へは、はかせ、申やう、「これは、おなしやなみに、しゆつしやうのしれぬをんなあり。そのをんなのわきなり」と、申す。

その時、座中の人く、みな、かんしけり。

【挿絵・第四図】

かねのふ、の給ふやう、「かまへて、この事、いさゝかさたして、をとほひめにしらすな。いろにも、見てとられな」と、おほせつけられ、そのまゝ、やかたのそとまはりに、いくへも、とのゐのもの共をすへをき、かねのふ、さらぬていにて、をとほひめにむかひ、おほせけるは、「しうかのしさいにより

て、たゞいま、さんたい申なり。そのほとは、心をなくさめ候へ」とて、さまぐのさうしなとを、とりいたし、をとほひめに、まいらせらるゝ。

さて、かねのふは、さんたい有て、はしめよりの事共、くはしく、そうもん申されければ、くきやうせんきましくて、「ふしきにおほせて、たいちあるへし」とて、「又、たゞのまらんちうをめて、このよしを、おほせて、たいちさせよ」と、ありければ、かねのふ、申されけるは、「われら、かひく、しくは候はねとも、たはかりて、かのけしやうのものを、たいらけ申さんに、なにのしさいの候へき」と、そうもん申されければ、くきやうせんきあつて、「もつとも」と、とうし給ひ、「さあらは、まんちうは、やかたのそとをしゆこし、にくるところを、たいちせよ」との、ちよくちやうなり。かねのふ、かさねて、申さるゝやうは、「おほそれおほき申事にて候へとも、それ、けしやうのものは、つるきにおそるゝよしを、うけ給はり候あひた、あはれ、御つるきを、くさし給はり候へかし。すみやかに、たいちつかまつり候はん」とそ、申されける。

みかと、えいふんましくて、かすの御つるきの中にも、御てうほうの、三てうこちむねちかゝ打たる、こきつねまるをそ、くたし給ふ。かねのふ、御けんを給はり、いそぎ、わかやにかへり給へは、まんちうは、かねのふと心をあはせ、やかたのそとのまはり、五へ、なゝへにとりまき、いかなるぬすみ、いたちほとものなり共、やはか、のかるへきやう、なかりけり。

さるほとに、かねのふは、まつ、御つるきをかくしをき、さ

らぬていにて、をとほひめに、の給ふやうは、「たゞ今、かへり候。さためて、まぢかねさせ給はん。いさ、はしゐして、ゆふすゝみせん」と、の給ける。

長とく二年、六月十三日の、暮かたのことなるに、ことをし
らへ、いまやうして、さけをすゝめ、さかつきのかす、かさなり
ければ、「いさ、すこし、まとろまん」とて、二人ともに、
木丁のうちに入給ひ、かねのふは、そらねふりして、ひめのき
しよくを、うかゝひ給へは、姫は、さけにえひて、せんこもし
らす、ふしたれば、「すは、時分はよきぞ」とて、かくしをき
たるつるきを、ひむぬひて、かのひめか心もとを、二かたなさ
しとをし、ひるむところを、くひうちおとし、そののち、手あ
しをきり給ひて、さて、火をともし、み給へは、その長、三尺
あまりの、けたもの也。

かしらは、とら、つるきのことくなるきは有。たうは、ふる
たぬき、あし手は、くまのことく也。おそろし、ありさま也。
みかどをはしめ奉り、くきやう、殿上人、ふしにいたるまで、
かねのふの手からを、ほめぬ人こそ、なかりけれ。

〔挿絵・第五回〕

かねのふ、申されけるは、「是、わかかうみやうにあらず。
ひとへに、こきつね丸の、御つるきのあくはうによつて、たい
ちつかまつり候」と、申されけり。

さて、このけしやう女のくひ、手あしをも、ぬひつかせ給ひ
て、らく中らくくわいを、三日引わたし、そのうち、かはらに
さらされたり。

さてこそ、「天下太平の御代となりしも、こきつね丸の御つ

るきのあくはう」と、人、申あへり。雪女とて、けしやうのも
のありと、今の世までも、申つたへしは、此時よりの事成け
り。